



TITLE:

リストの國民生産力説

AUTHOR(S):

白杉, 庄一郎

CITATION:

白杉, 庄一郎. リストの國民生産力説. 經濟論叢 1937, 44(5): 234-249

ISSUE DATE:

1937-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130941>

RIGHT:

神戶博士
還曆祝賀

記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和十二年五月一日發行

經濟論叢

第四十四卷 第五號

(通卷第二百六十三號。禁轉載)

奉
呈

神戶正雄先生

執筆者一同

目次

滿洲移民の特異性と掃匪問題	法學博士 山本美越乃	一
農家の負債と負擔能力	法學博士 河田 嗣郎	一〇
現代社會學に於けるパレット社會學の地位	文學博士 米田庄太郎	三三
幕末の商稅論	經濟學博士 本庄榮治郎	三三
實際政策と政策原則	經濟學博士 作田 莊一	六六
『維新の詔』に於ける變革の國是	經濟學博士 石川 興二	九六
シュレーデルの王室金庫論	經濟學士 小山田 小七	九七
アダム・スミスに於ける自由主義社會の理念的構造に就いて	經濟學士 中川與之助	一二三
工場内勞働者教育事業の目的	經濟學士 大塚 一朗	一五九
アフタリヨンの貨幣心理說に就いて	經濟學士 松岡 孝兒	一六四
明治初年の官營産業に就いて	經濟學士 堀江 保藏	一六四
財政學の基本問題	經濟學士 大谷 政敬	一八三
取引所實物化論と短期清算取引の應用に就いて	經濟學士 今西庄次郎	二〇二
貨幣の中立性に關する一考察	經濟學士 中 谷 實	二二八
リストの國民生産力說	經濟學士 白杉庄一郎	二三三
財政學と經濟政策論との交流	經濟學士 島 恭彦	二五〇

目 次

二

生産の構造と貿易	經濟學士 松井 清	三六九
租税の農業に及ぼす影響	經濟學士 山岡 亮一	三八六
再保險と共同保險との接近	經濟學士 佐波 宣平	三〇三
耕地管理組合に就いて	經濟學博士 八木芳之助	三五五
熊澤蕃山研究序説	經濟學博士 黒 正 巖	三六六
水産經濟學と其の課題	經濟學博士 蟠川 虎三	三五三
輸入制限と國內物價との關係	經濟學博士 谷口 吉彦	三六三
昭和の税制改革	經濟學博士 汐見 三郎	三八五
自然利子論	文學博士 高田 保馬	四〇七
財政學者の鐵道經濟に關する研究論著に就いて	商 學 士 武藤 長藏	四四四
現段階に於ける租税體系	經濟學博士 土方 成美	四七七
支那南北辨	法學博士 財部 靜治	四九七
赤字公債の消化	經濟學博士 小島昌太郎	五二三

リストの國民生産力説

白 杉 庄 一 郎

經濟學史の上から一般的に言つて、進歩的な經濟學者は總て直接にか間接にか人間生活を向上せしめるために經濟的生産力を發展せしめるといふことを實踐的關心として來たのであるが、特にそれと直接且つ自覺的に經濟學の中心問題とした所の一人として我々はフリードリッヒ・リスト (Friedrich List 1789-1846) を挙げることが出来る。この意味でリスト國民生産力説 (Theorie der Nationalproduktivkräfte) の考察はリスト研究の一項目でなければならぬ。のみならず、最近ドイツの學界に於てリスト復興といふことが言はれ、リストは國民社會主義の先驅者として擔がれさへしてゐる。そしてリストを單に保護貿易の理論家・政策家としてではなく、又歴史學派の單なる先驅者としてではなくて、同時にドイツ的な科學的國民經濟學の創設者とみ、それを發展せしめて新しい國民經濟學を再建せんとする試みがある¹⁾。所でリストの科學的國民經濟學はといへば、それが他ならぬ國民生産力説である。従つてリスト國民生産力説の理解と吟味はドイツに於ける一派のファシズム經濟學を判斷する上の一手がかりともなるであらう。

さて、リストが生産力といふのは富を創造する力 (Kraft, Reichthümer zu schaffen) 或は物質的富を獲得する力

1) F. Lenz, Aufriss d. polit. Ökonomie, Stuttgart u. Berlin 1927; A. Sommer, F. Lists System d. polit. Ökonomie, List-Studien Bd. 1. Jena 1927; E. Salin, Geschichte d. Volkswirtschaftslehre, 2. Aufl. 1929, S. 78 ff. 100 ff., A. Sommer, Der Wandel des Wissenschaftsbildes F. Lists, Schmollers Jahrbuch 1935, Heft 3. 又學史的にみる List 觀は E. Dühring, Kritische Geschichte d. Nat-ök. u. d. Sozialismus, 1871, S. 303 ff. u. a. 及び H. C. Carey, Principles

のことである。又それは富の原因 (Ursachen des Reichthums) とも考へられる。従つて生産力は富そのものとは異つたものであり、遙かに重要なものである。蓋し富をもつこと少くとも生産力をもてば富裕となり、富を失ふとも生産力はそれを補償するからである。このことは個人についても國民についてもいへる。彼が問題にするのは國民生産力である。それは國民の富を創造・獲得する力又は國民の富の原因と解されよう。²⁾ それについて彼は立入つた説明をなしてゐないが、彼は國民生産力の源泉 (Quellen der Nationalproduktivkräfte) についてはかなり詳しく論じ、³⁾ それを纏めて四としてゐる。曰く。「國民はその生産力を、諸個人の精神的並に肉體的諸力、或はその社會的・市民的並に政治的諸狀態及び諸制度、或は國民の使用し得る自然富源、或はその所有する用具即ち以前の精神的並に肉體的 efforts の物質的生産物 (物質的な農業資本・工業資本並に商業資本)、から汲取る。」⁴⁾ 又彼はこれらを夫々 (一) 個人的生産力、(二) 社會的並に政治的生産力、(三) 自然生産力、(四) 用具力 (Instrumentalkräfte) とも呼んでゐる。⁵⁾

個人的生産力とは個人の肉體的並に精神的諸能力のことである。我々はそれを勞働力と解してよい。勞働力の發現たる勞働をリストが國民の富の原因として承認することは勿論である。然しスミスが勞働のみを國民の富の原因としたと解して、これに反對し勞働以外の原因を求めるのである。⁶⁾ 自然生産力については問題はなからう。たゞリストが國民領土の自然的性質を強調し、それを溫帶と熱帶とに分け、前者の多様な自然富源を重視し、溫帶にのみ工業が可能であつて、熱帶の自然生産力は溫帶の工業に奉仕すべきであると考へてゐるのは注意を要する。⁷⁾ 次に用具力といふのは物質的資本或は物質的生產手段のことである。彼は資本を物質的資本と精神的資本とに

of Social Science 1873, vol. 2. p. 80 f. にみられる。

2) F. List, Das nationale System der politischen Ökonomie, (I. Aufl. 1841) heraus. v. Wäentig, 1904, S. 220-21.

3) a. a. O. S. 223 ff.

4) a. a. O. S. 322.

5) a. a. O. S. 292 ff.

分つ。精神的資本とは人格につき纏ふ所の、或は諸個人が社會的市民的並に政治的狀態から汲取る所の精神的並に肉體的諸力のことである。従つてこれは所謂社會的並に政治的生産力である。次に物質的資本を彼は農業資本工業資本及び商業資本に分ち、又私的資本と國民資本とを區別する。用具力として彼が問題にするのは物質的國民資本である。それはスミス等が考へる如く交換價値の總計ではなく、又單に節約によつて形成されるものでもない。リストは言ふ。物質的國民資本の増大は國民的精神資本の増大によつて制約され、農業資本の發生は工業資本の發生によつて制約される。又その逆の關係もある。而して商業資本は農工業資本の媒介者である⁶⁾。以上の個人的生産力・自然生産力・用具力は普通勞働力・自然又は土地及び資本として生産要素とされ、生産力の契機とされる所のものである。リストの謂ふ國民生産力をして國民生産力たらしめるものはそれらではなくて、社會的並に政治的生産力である。又これが彼の生産力説を最も特色づける。だからこれについては次に詳しく述べよう。

二

所謂社會的並に政治的生産力とは、勞働力・自然力・資本等の生産諸力を規定して國民生産力たらしめる所の經濟・政治的・法律的・精神的等の一切の社會關係である。かゝる社會關係が國民生産力の源泉とされるのは、それが生産諸力を國民的たらしめる條件であり、その限り國民生産力を創造するからである。而して社會的並に政治的生産力は既に述べた如く精神的資本ともいはれ、學問・藝術・道德・宗教等の意識形態をも含んでゐるが、特に重要なのは經濟關係及び政治的法律的諸關係である。

6) a. a. O. S. 223-24, 292 ff.
7) a. a. O. S. 68 ff. 306 ff.
8) a. a. O. S. 323-28.

そこで先づ考へらるべきは、政治的並に法律的の國民社會關係を前提すると同時にその基礎である所の經濟關係である。それは普通、勞働力・自然又は土地・資本と並んで生産要素とされる勞働又は産業組織であつて、いはゞ國民の生産關係である。かゝるものとしてリストが考へてゐるのは分業である。分業は種々の作業の多くの個人への分割であるが、而も同時に種々の活動・意見・力等の共同的生産のための結合でもある。即ち分業は同時に協業である。而して作業の生産性の根據は單に分割ではなくて、本質的には協同にある。分業の利益は作業分割にではなくて、一、共同目的に對する生産諸力の結合に原因する。同じことは國民經濟の全體についても言へる。即ち國民經濟には、國民的分業と國民生産力の結合、(die nationale Teilung der Geschäftsoperationen und die Konföderation der Nationalproduktivkräfte)と云ふことが行はれる。⁹⁾そしてその結果國民社會に國民福祉が齎されるのは、恰も一工場に於て分業と生産力結合の結果、工業製品が得られるのと同様である。従つて一國民の社會狀態は一般に分業と生産力の結合といふ原理によつて判斷されねばならぬ。¹⁰⁾

リストが國民的分業として觀るのは、精神的職業と物質的職業、物質的職業の農工商業への分割である。曰く、「國民に於ける最高の分業は精神的職業と物質的職業との分割である」と。而して兩者は制約し合ふ。次に「物質的生産に於ける最高の分業と生産諸力の結合は農業と工業とのそれである。」こゝに於ても兩者は制約し合ふ。而して商業は農業と工業、及びそれらの特殊部門の間の媒介者である。農工業の分業に基いて、國民生産力は農業生産力或は農業力と工業生産力或は工業力とに分けられる。兩者の關係については「同一の政治的權力の下に結合されたる同一國民に於ける農業力と工業力とは永遠の平和の裡に生き、戦争と外國の政策によつてその相互作用

9) a. a. O. S. 239-42, 66.

10) a. a. O. S. 251.

用を攪亂されず、従つて國民に對して福祉・文明並に勢力に於ける不斷の進歩を保證することが出来る、¹¹⁾と言ふ。而も彼は工業生産力を以て國民生産力の基礎となし、國民生産力の源泉に對する工業力の影響といふ形で國民生産力説を展開し、工業力の育成によつて國民生産力は最もよく發展し、農業も繁榮すると説く。¹¹⁾更に彼は農工業の國際的分業をもみてゐる。がこゝではこれらの點に立入るまい。尙彼は國民的分業並に國民生産力の結合は、生産諸力の均衡又は調和を前提すると考へる。生産諸力の均衡といふのは總ての生産力が相互に適正な關係にあるといふことである。それがためには、私的利益が國民利益に従屬せしめられ、同時に生存する諸個人並に相續く世代が同一目標に向つて努力しなければならない。その時に初めて國民は生産諸力を調和的に發展せしめ、私的産業は繁榮するであらう。¹²⁾

そこで國民的分業並に生産諸力の國民的結合といふ國民の生産關係は政治的・法律的の諸關係を前提することが知られる。リストが社會的並に政治的生産力に於て最も重視するのは政治的並に法律的諸關係である。蓋し生産諸力は總て國民の國家的統一・永續勢力・法律その他の公共施設を前提すると考へてゐる。このことを示す特徴的な言葉を引用してみよう。

「諸國民の生産諸力はたゞに諸個人の勤勉・節約・道德性並に知性、或は物質的資本の所有によつて制約されるのみならず、また社會的・政治的・市民的制度並に法律によつて、而して就中國民體の永續・獨立並に勢力の保障によつて制約される。如何に諸個人が勤勉・節約・發明的にして、企業心に富み、道德的にして聰明であらうとも、國民的統一・國民的分業・生産諸力の國民的結合なくしては、國民は決して高度の富裕と勢力とを獲得せぬであらうし、又その精神的・社會的並に物質的財寶を確保し得ないであらう。¹³⁾

11) a. a. O. S. 292 ff.

12) a. a. O. S. 251-52, 254-55, 66.

13) a. a. O. S. 66.

「私的産業は、もし公の事情が不都合であるならば、貿易・産業及び國家並に國民體の富を支持することは出来ない。又個人はその生産力の大部分を政府の政治組織並に國民の勢力から受取るのである。」¹⁴⁾

「國民の勢力は富よりも重要である。……國民の勢力は新しい生産手段を開発する力であり、そして生産力は富が生長する樹であり、果實を實らせる樹は果實そのものよりも價值あるものだからである。勢力は富よりも重要である。何となれば、國民は勢力によつて生産的源泉を開発するばかりでなく、昔の及び彼等が以前に獲得した富の所有を維持するから、又勢力の反對即ち無勢力は、我々が所有する總てのものを、單に富のみならず、我々の文化・我々の自由・否我々の國民的獨立をさへ、我々よりも優れた勢力をもつものゝ手に歸せしめるからである。」¹⁵⁾

「キリスト教、一夫一婦制、奴隸制並に農奴制の廢止、王位の尊嚴、字母文字・印刷機・郵便・貨幣・度量衡・曆及び時計の發明、治安警察、自由土地所有制の採用、交通機關は生産力の豊かな源泉である。このことを納得するためには歐洲諸國の狀態と、アジア諸國のそれとを比較してみさへすればよい。思想並に良心の自由の國民生産力に對する影響を知るためには英國の歴史とスベインのそれとを讀んでみさへすればよい。訴訟の公開・陪審裁判・議會による立法・國家行政に對する民衆の監督・公共團體の自治・公益目的のための聯合は、立憲諸國の市民並に國家權力に、他の手段では殆んど得られない所の力の總和を與へる。生産力の増減に大小の影響が及ぼされないやうな法律或は公共施設といふものは殆んど考へられない。」¹⁶⁾

「國民の生産諸力の總和は、各々獨立に考察されたに過ぎない所の總ての個人の生産力の總計ではない。……それは主として社會的並に政治的諸狀態、就中國民が國民内部に於て分業並に生産諸力の結合を成就する度合に制約される。」¹⁷⁾

かくして、リストの所謂國民生産力の中核或は基礎をなすのは社會的並に政治的生産力であつて、後者の骨子をなすのは經濟的・政治的並に法律的諸關係である。それらは個人の勞働力・自然力及び資本をして國民生産力たらしめ、まさにそのことによつてそれ自體國民生産力の一契機となる。即ち、勞働の生産性は國民分業並に協業といふ國民の生産關係によつて高まる。土地の生産性も國民領土の自然的性質によつて制約され、而も單に領土

14) a. O. S. 112.
15) a. O. S. 126.
16) a. O. S. 227-28.
17) a. O. S. 263.

の自然的性質によつて與へられるものではなくて、精神的並に物質的勞働・資本及び一般に社會の完成によつて與へられるものである。¹⁸⁾又物質的國民資本の形成も既に述べた如く、國民的精神資本即ち社會的並に政治的生産力によつて制約される。而も國民生産力は工業力に媒介されることによつて最もよく發展する。その工業力を育成するためには、國民の經濟的・政治的並に法律的諸關係を變革・調整して國家は工業保護政策を採用しなければならぬ。これがリスト國民生産力説の精髓である。このことをよりよく理解するために我々は國民生産力説に對立せしめられる交換價值説に關する彼の批判をみよう。

三

リストが交換價值説として最も鋭く批判するのはアダム・スミス並にその學派の見解である。¹⁹⁾がそれをみる前に彼の重商主義並に重農主義觀を一瞥しておかう。所謂重商主義は國民的立場に於て、交換價值の現在に於ける利得又は損失を全く顧慮せず、一國民の産業・貿易の育成のみを眼中においた。彼はかう考へ、重商主義 (Mercantilism) と云ふ稱呼は誤りであるとして、それを産業主義 (Industry system) と呼ぶ。然しそれが單なる國民的立場に立つて萬民的立場を全然没却したとの批判は既にみた。²⁰⁾次に重農主義又は農業主義。フランスに於ては封建制度と重商主義 (コルベール主義) とのために農業衰頹し、その必然的結果として全産業は衰頹した。農業をそれらの桎梏から解放しなければ國民福祉は實現され得なかつた。そこで識者は農業が富の唯一源泉であるとして、國民工業力の價值及びそれに到達する方法を看過し、自由貿易の萬民的原理を以て總ての災厄を治癒し得る萬能藥とした。蓋し彼等は宮廷の寵臣であり、貴族及び僧侶の親友であつたので、國民解放のために絶對權力

18) a. a. O. S. 358 ff., 306 ff.

19) List は主として Adam Smith, J. B. Say について語り、D. Ricardo に言及する所は極めて少い。彼は Ricardo を餘り讀まなかつたやうである。Gide et Rist, Histoire. p. 316 n.

20) Das nationale System, S. 458-59, 444 ff. 拙稿「萬民經濟學と國民經濟學——リストの國民經濟學について」經濟論叢、第四一巻第四及び五號

と闘争することも出来ず、又しようともせず、改革案を深遠な學說の内に量し、博愛と萬民主義に慰藉を求めたのである。²¹⁾

スミスは重農主義の萬民主義を承繼ぎ、國民體並に國家權力を無視した。そして個人を總てを創造する力の創造者へ昂めた。それは彼が創造する力ではなくて、創造されたもの即ち物質的の富或はむしろそれが交換に於てもつ所の價值を主要な研究對象とすることによつてであつた。即ち個人主義は國民的統一や生産諸力の國民的結合から發生する諸力を隱蔽するために唯物主義に走つた。蓋し價值を生産するのは個人であり、國家は價值を生産すること不可能にして、その作用は生産力の喚起・促進・保護に限られざるを得ないからである。従つてかゝる交換價值説は、交換價值を生産するものだけを生産的として、國家に價值の生産性を認めないのは勿論、生産力の生産性とも否定する。そして生産力の育成を自然・偶然或は神に委せる。又それは部分的分業・私的資本の増大による生産力の發展のみをみて、國民的分業・國民工業の勃興・それから起る外國貿易並にその結果たる生産力の増大には何らの價值をも認めない。たゞ個人が交換價值を得さへすればそれでいゝのである。つまりそれは商人的觀點に立つた首尾一貫せる重商主義である。²²⁾——尤もスミスはその名著に『諸國民の富の性質と原因の研究』と題し、富と原因とを區別してゐる。又彼はその緒言に、勞働は各國民がその富を創造する所の元本であり、富の増大は大部分勞働の生産力即ち國民勞働の知識・熟練並に合目的性の度合と生産的従業者數と不生産的従業者數との割合に依存する、と述べてゐる。こゝでは彼が一般的に諸國民の狀態は主にその生産諸力の總和によつて制約されるといふことを洞察したことが分る。然し彼は重農主義から承繼いだ萬民的理論と彼自身の輝しい創見

21) a. a. O. S. 452-54.

22) a. a. O. S. 456-57.

たる分業論に支配されて、生産力の觀念を追求することが出来なかつた。²³⁾ そのため彼は、唯物主義・自己主義・並に利己主義に陥り、彼の學派の誤謬の基をなした。スミス學派が交換價值説以外のものを教へないといふことは、彼等がその學說を交換價值の概念に基礎づけるといふことの外に、その學の定義からも明かである。例へばセイは言ふ、政治經濟學は如何にして富即ち交換價值が生産・交換・分配・消費されるかを教へる所の學である、と。又マカロツクは明確にそれを價值の學と呼び、近代英國の諸學者は交換の學であるといふ。これに反對してリストは言ふ。政治經濟學はたゞ單に如何にして交換價值が諸個人によつて生産・交換・分配・消費されるかの學ではない、それは國民の全生産力が如何にして喚起・育成されるか、或は抑壓・破壊されるかに關する學である、と。²⁴⁾ かくしてリストはスミスに始る學派を産業主義と呼ぶのは誤りだとして、交換價值主義 (Tauschwerissystem) と呼ぶ。²⁵⁾

交換價值説と國民生産力説との相違は、先づ國民の富並に生産的といふ概念の相違に現はれる。價值説は直接に物質的富を創造するものだけを生産的だとする。生産力説は物質的富のみならず、生産力を創造するものを生産的だと考へる。²⁶⁾ 例へば法や秩序を維持し、教育・宗教・學問・藝術等に従事する所の精神的勞働者は、スミスが考へた如く、價值説からみれば不生産的である。尤もセイはそれが交換價值で支拂はれるから生産的だといふ。然し交換價值で支拂ふといふことはその所有者の交替に過ぎず、それを増加するものではない。だからセイが價值説に立つかぎりさう言ふのは矛盾であつて、その限りセイよりもスミスの方が徹底してゐる。而してこの矛盾は生産力説によつて初めて正される。即ち、人が國民の生産力を、交換價值の所有ではなくて、國民の富と考へる

23) a. a. O. S. 220-22.

24) a. a. O. S. 225-26, 463-64.

25) a. a. O. S. 454.

26) List は生産的といふ概念を更に擴張して、直接に生産物又は生産力を創造するもののみならず、生産と消費或は生産諸力に對する刺激を創造するものも生産的であると考へる。a. a. O. S. 409 ff.

場合にのみ、人は精神的勞働者を生産的と呼ぶことが出来る。スミスが工業者に生産性を附與するために重農主義者に對して富の概念を擴張した如く、我々はスミスに對して精神的勞働者に生産性を附與するために國民の富の概念を生産力にまで擴張しなければならぬ。かう言つてリストは國民の富に關する新しい主張をなしてゐる。

「國民の富は交換價值の所有にではなくて、生産力の所有に存する、恰もそれは漁夫の富が魚の所有にではなくて、繼續的に魚に對する欲望を充足すべき能力並に手段に存するが如くである、」と。従つて國民の繁榮は國民が富即ち交換價值を蓄積した程大なのではなくて、その生産力を發展せしめた程大なのである。²⁷⁾

次に國民生産力説は、右の如き國民の富・生産的の概念規定に従つて、國家活動も生産的であり、一切の國民社會關係が國民生産力の源泉だとする。これが國民生産力説の交換價值説から區別される最も重要な點である。例へばセイは法は富を創り得ないと言つてゐるのに對して、リストは成程法や公共施設は直接には價值を創造し得ない。然しそれは生産力を創造すると言ふ。²⁸⁾ かくの如く、從來の學派が國家政策及び政治的權力を除外して國民の政治的關係を顧慮しない所に萬民的傾向がみられる。經濟學がその研究對象を價值と交換とに限定して、資本・利潤・勞賃・地代等の概念に固執するかぎり、これらの物質的富と政治的權力との相互作用がみられないのは當然である。²⁹⁾ 反之、生産力説は國民的である。即ちそれは國民生産力の育成のために價值を犠牲にすることを認める。一體國民は精神的又は社會的諸力を獲得するためには物質的富を犠牲にしなければならず、將來の利益を確保するためには現在の利益を犠牲にしなければならぬ。例へば保護關稅が初めは工業品の價值を高めるといふことは眞實である。然し時日の經過につれ工業力が發達した暁には工業品が外國から輸入されるよりも國內でよ

27) a. a. O. S. 460-61, 233.

28) a. a. O. S. 233, 228

29) a. a. O. S. 229.

り廉價に生産されるであらうことも同様に眞實である。従つて保護關稅によつて價值が犠牲にされるにしても、その犠牲は生産力の獲得によつて償はれ、生産力は將來價值を無限に獲得せしめるのみならず、戰時に於ても産業の獨立を保證する。だから價值の支出は國民産業育成の代償とも考へられる。³⁰⁾ 要するに從來の學派が國民の富は總ての個人の富の總計に過ぎず、各個人の私的利益は一切の國家政策よりもよりよく富の生産及び蓄積を促進するといふ命題から、各個人が自由に放任される場合にのみ國民産業は最もよく繁榮するであらうといふ結論を引出すのは、交換價值説と國民生産力説との混同によつて隱蔽された詭辯である。蓋し貿易統制によつて直接に、交換價值の國民的總計ではなくて、國民生産力の總和を増大することが我々の問題だからである。³¹⁾ かう言つてリストは保護政策に理論的根據を與へる。そしてそれが交換價值説に反對するリスト國民生産力説の直接當面の目的だつたのである。

四

そこで、リスト國民生産力説の歴史的並に現代的意義を理解するためには、それが基礎づける所の保護政策を必要とした當時のドイツの事情を一應理解しておかねばならぬ。第十九世紀の前半——この時代にリスト（一七八九——一八四六年）は活躍したのであつて、主著『政治經濟學の國民的體系』は一八四一年に出た——ドイツに於ては商業資本は既に高度の發展をとげてゐたが、それはまだ産業資本に轉化せず——この轉化即ち産業革命は一八四〇年代特に一八四八年以後急激に始まつた——産業特に工業の發展後、支配的な産業は農業であつて、政權は土地貴族階級によつて確守され、小邦分立して近代國家統一は勿論國內市場の統一さへまだ實現されてゐな

30) a. a. O. S. 134-35, 74.

31) a. a. O. S. 262-63.

かつた。然るにイギリス及びフランスに於ては國家統一・産業革命は既に一應完了し、特にイギリスに於ては産業資本は不動の地位を築き上げて世界市場を席卷し、自由貿易をその綱領として掲げさへしてゐた。未成熟なドイツ産業資本はこれに抗し得ず、國外市場は勿論、國內市場もその蹂躪に委さねばならなかつた。³²⁾かゝる事情の下に於てドイツで先づ要求されたのは近代國家統一の完成とそれによる産業特に工業の發展に對する保護助長とであつた。而してそれはドイツ國民の要求であると同時に、より一層未成熟なドイツ産業資本の要求であつた。蓋し國民全體の利益は國民一部の利益を媒介としてのみ實現され得たからである。リストは、外はイギリスフランス特に前者の産業資本に對し、内は強固な封建的勢力に對して、ドイツ國民の名に於て未成熟なドイツ産業資本を代辯したのである。そのために彼が蒙つた反動勢力による迫害と壓迫、それに對する執拗な闘争の歴史についてはこゝに繰返へすまい。³³⁾ともかく彼はドイツ市民革命のために一身を捧げつくしたのである。そこにドイツ資本主義の發展に對する彼の輝しい功績があると同時に、彼がドイツ國民の名に於て想起される所以がある。

従つてリストの國民生産力説は先ず國民全體の立場に於て評價されねばならない。第一に彼は資本主義經濟の生成と共に發展して來る社會的生產力を國民生産力に於て把握した。實際彼の主張する如く、勞働力・自然力・物質的資本等の生産諸力が國民領土の自然的性質・國民の素質・國民文化——國民の經濟的・政治的・法律的・精神的・諸關係並にその歴史的傳統等——によつて制約されること、而して生産諸力を國民的たらしめる國民の經濟的・政治的・法律的・精神的諸關係がそれ自體國民生産力の一契機であることは承認しなければならぬ。かくの如く、

32) 加之農業國としてのドイツの對イギリス農産物輸出はイギリスの穀物條例によつて阻止されてゐた。この事情に制約されて List は農業に保護政策を適用しなかつた。a. a. O. S. 10, 70ff., 279ff., 495 ff.
33) M. E. Hirst, Life of Friedrich List, London 1909; F. Lenz, Friedrich List, der Mann und das Werk, München 1936.

生産諸力は國民的基礎をもち、その上で發展するものであるが、而もその發展は一應國民全體の利益と一致する。これが理解さるべき第二の點である。リストに於ては國民生産力の發展は工業力の育成によつて可能なのであるが、工業力の育成は工業者にのみ有利なのではなくて、農業者特に地主にも下層階級の人々にも有利である。³⁴⁾特に下層階級の生活向上について彼はかう言つてゐる。それは普通身分の低い人々の贅澤と呼んで非難される。役人や地代生活者達は、勞働者がコーヒーに砂糖を入れて飲むといつて吃驚仰天し、農夫が麻服を毛皮と換へるといつて悲しみ、女中がやがて主婦と區別されなくなるといつて恐れる。そして彼等は數世紀前の服裝制限や消費制限を賞讃する。然し勞働者が富裕な人々と同じ様に衣食する國々に於ける勞働能率と粗末な衣食に満足してゐる國々に於けるそれとを比較するならば、享受の増大が一般福祉の犠牲に於てはなくて、生産諸力の發展から起つたといふことが分るであらう。服裝や消費の制限は社會大衆の努力を抹殺し、怠惰と因習を助長するに過ぎないと。³⁵⁾こゝに我々は國民全體の立場が現はれてゐるのを見る。然し彼が勞働者・農民の利益に關心する所は極めて少い。工業力の育成が國民全體の利益に矛盾しないと主張する場合に彼が最大の關心を示してゐるのは土地貴族階級である。そこに封建的勢力に對して國民の名に於て産業資本家階級を代辯した點が明瞭に現はれてゐる。かくの如く國民全體といふものも歴史的には制限された形をとらざるを得なかつたのである。そこで我々は國民生産力説の市民的側面を吟味しなければならない。

五

リストは國民生産力説を交換價值説から區別し、國民の富・生産的等の概念を生産力から規定した。總じて俗

34) Das nationale System, S. 334 ff. 74 ff.

35) a. a. O. S. 412-13.

流市民經濟學が交換價值をその對象の總てとするのに對して、國民生産力を強調した點、特に國家を生産力に於て把握した點には興味深いものがある。然し所謂國民生産力は、彼が意圖した如き資本主義社會に於ては、實は交換價值の創造力である。だから國民生産力を潛勢態に於ける富とするのは正しいとしても、それを顯勢態と同視するのは概念的紛淆であつて、資本主義社會に於ては生産力の發展は交換價值の増加として現はれ、それによつて認識される、又交換價值の増殖は生産力發展の結果であると同時に原因である。だからこそリストが極力排撃するスミスは交換價值の増殖を通じて生産力の發展をみたのであり、國民生産力説は交換價值説を否定しつゝそれと結び付かざるを得ないのである。つまりリストはイギリス産業資本に對してドイツ産業資本を代辯したのであるが、そのため一應スミス並にその學派に反對し、その實同じことを違つた形で主張したともいへる。

そこで重要なのは交換價值の創造といふ限定に於ける國民生産力に照應する國民生産關係の問題である。リストが理想とした經濟形態は經濟的自由——貿易統制も自由貿易を目指してに他ならなかつた——の支配する當時のイギリスにみられた個人主義經濟組織即ち資本主義經濟であつた。所でそこでは國民生産力はその契機に分解されて個人に所有されてゐる。勞働力は勞働者に、自然力は土地所有者に、資本は資本家に。そしてこれらを綜合して得られる國民生産力は、國民全體によつてではなくて、資本家によつて所有されてゐる。即ちそれは主體的には資本家の生産力として、對象的には資本の生産力として現はれる。而してこゝに資本とはリストの考へる如き單なる物質的生産手段ではなくて、交換價值否餘剩價値の獲得手段である。資本が餘剩價値獲得の力となる如く、貸付資本は利子を、土地は地代を、勞働力は勞賃を取得する力となる。これが資本主義社會に於ける國民

36) Gide et Rist, Histoire, p. 319 n. — 尙同書によれば List の生産力説の淵源は Dupin, Situation progressive des Forces de la France, Paris 1827 にあると。——W. Roscher, Geschichte d. Nationalökonomie in Deutschland, 2. Aufl. 1924, S. 984; B. Hildebrand, Die Nationalökonomie d. Gegenwart u. Zukunft, Bd. I. Frankfurt a. M. 1848, § 18.

の生産關係——それをリストは自然發生的な國民分業並に協業に於てしか考へなかつたが——の根本的なものである。そしてそれに政治的・法律的・精神的等の諸關係が對應する。彼がこれら一切の社會關係が生産力を規定し、従つてその限りそれらが國民生産力の源泉であると考へ、これらの諸關係を變革・調整することによつて國民生産力の發展を企圖したのは全く正しかつた。實際市民的國民生産關係の下に於て國民生産力は巨大な發展をとげたからである。然し國民生産力が資本の生産力として現はれねばならず、而もそれが國民意識の支配下におかれずして無自覺的必然に放任されてゐる所に矛盾が潜在する。矛盾といふのは國民生産力が必ずしも國民全體の利益と一致しないといふことである。そしてそれは國民生産力の發展と共に現實化し、その結果終に國民生産關係並に其他の社會關係は國民生産力の契機たることを止めてその破壊的契機に轉化するに至るものである。

リストは或程度この矛盾を知つてゐた。そしてその解決を過剰生産力の國外移出に求めた。言ふ所は凡そかうである。文明の影響下に人口・精神力・物質的資本は、それが必然的に未開拓の諸國に溢出せざるを得ないまでに増大する。もし一國民に於て、人口が生産資料の生産よりもより多く増殖し、資本蓄積大にして終に一國內に投下部面をみなくなり、機械が多くて失業を惹起し、製造品が過剰となるならば、それは産業・文明・富及び力が一國民によつて獨占され、多くの耕作可能の土地が野獸の棲むに委せられ、人類の大部分が野蠻・貧困・無智に沈潜してゐることを自然が欲しないといふことの證左である。文明諸國民は不易の自然法則によつて不可避免的にその生産力を未開諸國に移す。實に地球上の總ての國民・總ての國土の開化は文明諸國民の聯合によつてのみ果され得る所の使命である。こゝに生産力の萬民的傾向がある。この傾向を無視したために、例へばマルサスは人口制限の誤りに陥り、チャルマーやトレンスは資本の増大・無制限の生産は災惡であると言ひ、シスモンディは工場を公安に害あるものと考へた。然しそれは個々の國民の現在の状態のみを目にして、全世界の状態及び人類の將來の進歩を顧慮しないものである、と言つてリストは人類生産力を單なる國民的觀點から判斷する者に反對する。³⁷⁾尤も彼は、この人類生産力に基く國際的な分業並に生産諸力の結合は最高のものであるが、戦争・外國の政策等の偶然の事件によつて破壊され易いが故に、國民分業

37) Das nationale System, S. 297-17.——さきに我々は、List の國民經濟學が萬國民經濟學を止揚せんとするものであることを知つたが、(前掲拙稿)こゝでその最も具體的な面をみる譯である。

並に生産諸力の國民的結合を主とし、前者をこれに従屬せしめることが各國民の利益だと考へる。³⁸⁾それはともかく、彼が生産力の人類的傾向をみてゐるのは全く正しい。然し資本主義社會に於ては人類生産力も國民生産力と同じく資本の生産力として現はれる。資本の利潤闘争が人類生産力を増大せしめることは疑ひなき事實であるが、然しそれは、必ずしも人類全體の利益と一致しない、のみならず國內的には國民全體の利益とも矛盾し得る。つまり市民的生産關係の下に包攝しきれない生産力の國外移出もかの矛盾を解消せしめるものではなくて、それを擴大し國際的にするに過ぎないのである。

國際闘争は、競争の獨占への轉化と共に、保護關稅をして獨占關稅に轉化せしめた。リストのみる所を以てすれば保護の必要ならざる所にそれが要求され許與された譯である。平和が望まれ得た所に實現したのは戦争であつた。國民の富裕が約束されたのに民衆は窮乏し、恐慌・失業等に苦しまねばならなかつた。リストの主張が大體實現された時ドイツが否世界が經驗したものはこれであつた。そして今なほしつゝあるものもこれである。蓋し彼の考ふる所と反對のものが結果せざるを得なかつたのは、彼の主張が市民的に限定されたものであつたからである。³⁹⁾

リストは市民的なものによつて國民全體のものを實現せんとした。然るに今や市民的なものは國民全體的なものと矛盾するに至つた。この時に當つて市民的なるものを國民全體的なものによつて保持し隱蔽するためにリストは呼返へされてゐる。實際リストは、國內分裂の國民的統一・國家權力の伸張・列強の壓迫に對する防衛・軍備充實・領土擴張等々ファシズムに通ずる多くのものをもち、彼の市民的國民主義は、今そのまゝ適用されば、ファシズムとして通用する。然しそれは當時のドイツに於ては進歩的であり得たのである。即ち國民生産力説は一切の國民社會關係を生産力の源泉とし、封建的なそれを變革することによつて國民生産力就中工業力を發展せしめんとするものであつた。従つてその正しき理解は却つて、國民生産力發展のためには今や市民的な國民生産關係其他の社會關係を變革することがその不可缺の條件であることを示唆するではなからうか。

38) a. a. O. S. 253.
39) 前掲拙稿